
魔法戦記リリカルなのは Sword

剣聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのは Sword

【NZコード】

N1481M

【作者名】

剣聖

【あらすじ】

何処にでも居る普通の少年、隆矢は「死んだ」。

彼の人生はそこで終わつたはずだったのだが、彼は生きた。

転生。それが、彼が生きた理由。

新たなる世界にて、彼は何を思い、何の、誰のためにその力を振るうのか。

仲間、敵、家族。あらゆる様々な人間の考え方と答えの中で、彼は進み続ける。

この嘘から始まった現実の世界で得た、彼の答えの一つだから。

『魔法戦記リリカルなのは Sword』始まります。

注意！このお話にはユーノなどのリリカルキャラが余り出て来ません。オリキャラと、あのシリーズからのキャラが主体となります。

プロローグ（前書き）

とあるサイトにて投稿している物に、少し修正を加えた物です。
では。

プロローグ

プロローグ

毎日の平穏な日常。

ただただ、過ごすだけの日々。

そして俺にとっては現実では無いこの世界。

いつからだらう?

悪くないと思い始めたのは。

全てをオレンジ色に染め上げる夕暮れの中、彼、

富岡 隆矢とみおかりゅうやは一人歩

いていた。

普段は共に帰る幼馴染が居るのだが、生徒会の仕事やらで居ない。

町のアスファルトを踏みしめながら、学生カバンを揺らす。太陽が眩しく、建物の影になるべく入るよう歩いていた。

「家に帰つたら向するかなあ……ゲームでもするか?」

いやいやソレとも筋トレでも・・・・・・と、唸りながら歎むその姿は青春真っ盛りの高校一年生に相応しい。

結局、

「アニメ見よ!」

とこいつになつた。

やるしが決まつたら後は早い。

ちょっとだけスピードを上げて、彼は家への帰路につく。

何事もない、平穀なただの日常。

だが、その平穀はたやすく壊れる物だとこいつとを彼は今日始めて

知ることになる。

「キヤアアアアアツ！」

甲高い女性の悲鳴が隆矢の耳を貫いた。

咄嗟に振り返ると三十メートル先の銀行店の前で人だかりが出来ており、一人の女性が黒ずくめの男にナイフを突きつけられていた。女性を羽交い締めにする男の鼻息は荒く、体は震えている。

「……はつ？」

「日常」じゃああり得ない、「非常」な出来事に隆矢の思考は一瞬停止する。

その間にも時は進み、男は大声で叫んでいた。

「は、早く出せ！出さねえとこいつを殺すぞ！」

ナイフを突きつけられた女性はもはや悲鳴を上げる余裕すら無くなつたのか、涙目で震えながら自分の首に突き刺さらんとばかりに光る銀色のナイフを見る。

そのナイフは確かに人を殺すために充分な力があると告げていた。

しばらくその光景をまのあたりにしていた隆矢だが、我に帰り自分の手が震えているのを自覚しながらも携帯を取り出した。

路地裏の喧嘩で一対一なら負ける気は無い。

だが、相手に武器があるのだ。しかもバットなどではない、切り裂いて殺すための武器が。

つまり、自分にあの人には助けられないと。

「だ、誰か助けて……」

だけど。

警察に少し離れたところから通報した隆矢は、その声が何故か聞こえた。

それを聞いたら、何故か体の震えが止まる。

「……そう、だな。うじうじしてんなんて、俺らしくもない」

脳内がクリアになり、相手の状態をよく見つめる。

相手はどうやら精神的に追い詰められており、辺りを細かく気にしている。隆矢が警察に通報するのを見られなかつたのは、ひとえに人だかりが出来てるからに過ぎない。

「……でも」

一つ、隆矢は気がついた。

そして――

「クソ！」

男は焦っていた。理由は簡単、逃げられないからだ。
アタッシュケースに金をありつたけ詰め込んだ後には銀行の周りは
すっかり人だかりが出来ていた。

「さっさと逃げ！」

だが男のチラつかせるナイフの力は凄まじく、周りの人だかりも薄
れて行く。

これで逃げれると思った瞬間――

ダンッ！

大きな着地音が響いた。

辺りがシンッとなり、男は音の聞こえた後ろを振り返る。そこには自分に向かつて拳を振るう少年、隆矢が居た。

「ラアアアアアアアッ！！」

はつ？と疑問に思つまでもなく、拳が顔面を捉える。その一撃で男はよろめくが、ナイフは手放さない。だが、

「フツ！」

次の一撃を同じ場所に貰い、今度こそナイフを落とす。男の思考は混乱の極みだった。

(なんでコイツはどこから――――――)

脳みそが揺れながらも、男は上にある物を捉えた。

銀行とは反対側に立つビル。そして開け放たれた三階の窓。

そう、隆矢が気がついたことは男が上を見ていないこと。

そして上からなら人だかりを気にせずに飛び込める。

三階ぐらいからなら、足から着地できれば人間は死がない。

「グッ……ウガアアアアアアツー！」

ナイフという自分の唯一の武器を失った男は、人だかりをかき分け、何処に消えた。

すぐにパトカーのサイレンも聞こえ始める。

「ふう……」

ホツ、としながら彼は息を吐く。

まだ終わってなどいなかつたのに。

キュキュー！といやな効果音が聞こえ、男が去った方から悲鳴が上がる。

ハツとなつて隆矢が見ると、何かが近付いてくる。

人だかりがサツ！と分かれ、飛び出して来たのは一台のトラック。操縦席に座る男の目は狂気に染まって血走っていた。

「おいおい！」

巫山戯た行為にツツコミながらも体は回避しようと動くが、へたり込んだままの女性……いや、少女に気がついた。

一瞬、ほんの一瞬、隆矢の動きが止まった。

自分で避けるのは簡単だ。だが少女を抱えて走つて避けれれるか？
否、不可能だ。

だから、隆矢は、

屈んで少女を掴み、思いつきり放り投げた。

少女は宙を舞い、アスファルトの地面に滑り込む。ギリギリ、トラックの走行範囲から抜け出ている。だが隆矢が動けたのはそこまで。

トラックの銀色の体が、目の前にあつた。

今更死への恐怖を思い出したのか、体が少し震える。

それに隆矢は苦笑して――――

ドンッ！と、トラックに跳ね飛ばされた。

耳に自分の骨が折れる生々しい音が響き、体中の内臓が潰れる。

そして十メートル程血の後を地面に垂らしながら吹き飛び、地面に転がり込んだ。

やがて転がるのも止まり、地面に仰向けになる。

トラックは止まつたのか、走行する音は聞こえなかつた。

耳に入るのは、人々の悲鳴と、パトカーのサイレンと、かけよつて来る人の足音だけ。

体の痛みはもうさっぱり麻痺して分からず、分かるのは、自分の体を照らす夕日の光のみ。

頭の中を様々な思い出が駆け巡った。

それをぼんやりと走馬燈なんだなと思いつつ、彼は夕日を見る。

夕日の光はオレンジで、あたたかかった。

（意外と、夕日ってのも悪くないな……）

隆矢は、始めて、夕日が好きになれそうだった。

だがそんな夕日の光も消えて行き、意識が闇に包まれる。

こつして彼、富岡隆矢は死んだ。

そして、目がさめたら第一の人生を歩むことになる。

これが、彼の始まり。
彼にとっての、物語の始まり。

プロローグ（後書き）

とあるサイトで投稿しています、剣聖です。

本来このお話はあるううの繋ぎの話だったのですが、相当広大になりました（汗）

これからも、よろしくお願ひします。

PSあのシリーズのキャラはまだ先です。

第一話 彼が掴み取ったもの

第一話 彼が掴み取ったもの

もう、落ち葉が舞い落ちる季節になつた。

そんなことを考えるのは何処ぞの詩人では無く、一人の少年である。

年は十四歳。中学校の制服を、身に纏つた黒髪黒目の中年。

彼は縁側にゴロンと横になりながら、秋の訪れを五感で感じ取る。

ふと、視界が急に暗くなり、影がさした。

それは誰かの影。

そしてその影の主たる少女に、彼は苦笑しながら言つ。

「パンツ見えるぞなのは」

「見えないよ！抑えてるもん！」

彼の名は高町隆矢。

剣術が得意な極々普通の人間、では無く。

一般的に「転生者」と呼ばれる存在だった。

彼が一度田の生を受けてから約十四年。
生まれた頃は散々だつた。

生まれて感じたのは混乱。状況整理なんて出来る訳が無かつた。
知らない家族に知らない場所。

分からぬことだけで、彼が自分を赤ん坊だと理解したのはそれ
から半年後のこと。

人間は馴れる生き物だ。

その種としての力のおかげで、彼は「ちょっと奇怪な赤ん坊」とし
て育つことが出来た。

状況を考えれば考えるほど、一時創作などによくある「転生」とし
か考えられない。
しかも、しかもだ。

新たな両親の苗字が、高町。

その他情報統計すると、生前よく見ていたアニメの世界だと分
かった。分かつて、しまった。

それを理解した瞬間、隆矢には世界が歪んで見えた。家族とも満足に接することが出来ず、全てが偽物に見え、全てが嘘に感じられた。

……アニメの世界？巫山戯るな。普通の現実を返せ！

そんなことを信じてもいなかつた神に恨むようになつてから五年がたち、家族に連れられてやつて来たのは病院。

そこの一室で母親、高町桃子が抱えている物を見た。それは一人の赤ん坊。世の中に当たり前に存在する、一人の赤ん坊。

それを見た瞬間、何故か彼の思考は停止した。

そして気がつくと、兄からその赤ん坊を手渡されていた。

手に五歳児の筋力には少しばかり重い感触が乗しかかり、白い布越しに温かい体温を感じられた。

それは、生きているという「現実」をちゃんと証明しており、隆矢の頭に衝撃を与えたのだった。

それからの隆矢は変わった。

前世の家族に別れを告げ、今世を生き抜くことを決め、動き始めた。木刀を振り、なのはが一人ぼっちのさいできるだけ側にいてあげ、家族の中心となって動き、そして。

彼はまだまだ先に起つる「未来」の出来事についてどうしようか考えながら、縁側から起き上がる。

「どうしたもんかねえ……」

「へつ？ 何が？」

「なんでもねえよ」

ポン、と頭に手を置いて撫でてやる。

なのはは頭を撫でられるのが好きで、よく隆矢は「猫みたいだな」とからかいなのはは必至で反論するのだが、

「ふにゃあああ……」

この鳴き声を聞くと説得力皆無なのがよく分かる。

そんな気の抜けた表情で気の抜けた声を出す妹に苦笑して、隆矢は

よつじゅうじょと、立ち上がった。

「メシだろ？ 今日はなんだ？」

「はつ！？ 危ない危ない……え、えっとねー今日はオムライスなんだよーだから早く食べよつー！」

「はいはい分かりました、お姫様」

幼少期のせいか、なのはは隆矢に対しても本当に遠慮が無い。まあ隆矢としても別に八歳児のお願いくらい、いいのであるが。

「……」

ふと、オレンジ色の光が目に入つて隆矢は足を止める。
外を改めて眺めてみると、そこには夕陽。
真っ赤な、オレンジ色の夕陽。

昔から、この太陽を見るたびに死んだ時のことを思い出す。
あの時の暖かさや光の強さは昨日のことのように、纖細に覚えていた。

そうやって昔を振り返っていると、服を引っ張られる感触を感じた。
現実に意識を戻し、見てみるとそこには膨れつ面のなのは。
その表情を見て苦笑し、隆矢は食卓へと向かったのだった。

十月七日の出来事である。

学校といつものは大体終わる時間が決まつてゐるもの。
つまり自然と学生の姿が目立つようになる時間帯がある訳で。

そんな学生達が目立つ夕方、学校指定の鞄を引つさげて隆矢は歩いていた。

「……だりい

帰り道、といつのはそれなりに疲れる物だ。

学校での勉強で疲れた体を動かすのはそれなりに力が必要だし、矢がもう一つ疲れている理由は、

「何で夕田が見えねえんだよ……」

お気に入りの夕田が完璧に見えないからだ。

理由は簡単。黒い雲が空を完璧に覆つてしまっているから。

今にも雨が振り出しそうである。

「……わざと帰るか、うん。それがいいな

やる」ことが決まつたら後は早い。

ちよつとだけスピードを上げて、彼は家への帰路につく――

「んっ？」

――うとしてふと頭を掠める。

(前にもこんな感じで、確か――)

たらを踏んだ瞬間、

世界が変わった。

「ツー？」

隆矢はその世界の異変に一瞬で気がつく。
いや、普通は誰でも気がつく。何故なら辺りにいた学生達や通行人が一人残らず消えたのだから。

風景に存在する様々な物質の色も変わり、空の色さえ光が捻じ曲がつたような異様な光に照らされている。

間違いなく、異常。

「なん、だよ……」れ

呆然として思わず口から漏れる声。

遠くまでよく見てみるが、隆矢の視力で捉えられる距離全てがこの異変に染まっていた。

「まさか……」

この異変に、隆矢は一つだけ心当たりがある。

だがそれは、この世界を前世と変わらない「普通の世界」だと思つていた隆矢が簡単には受け入れられないことだった。

魔法。隆矢の心当たりはそれだ。

そしてそれは事実である。

「エリアルシユート！」

「一。」

突然の掛け声と空気を切り裂く音に、隆矢は鞄を捨て地面を転がる。

この世界で学んだことの一つ。

それのおかげで隆矢は、襲つて来た空色の弾丸をかわすことが出来た。

敵に当たらなかつた光弾はアスファルトに着弾し、轟音を立てる。

「くつー！」

その衝撃による爆風を身に受けつつ、隆矢は道路に転がりこんだ。車はあるが運転する人間は居ないのでから、いつかのように轢かれ心配は無い。

「上からかーー？」

「チツ、今のを躱すか……」

上を見ると宙に浮き、恵々しそうに舌打ちをする同じ年くらいの少年が居た。

髪はオレンジ。目もオレンジだ。

そんな少年はそれなりの顔を不機嫌さで歪め、手に持つ何かの先端を地上の隆矢に定める。

それは機械仕掛けの、魔法の杖。

直感でヤバイと感じた隆矢は地面を蹴つて飛び。

「ブレイカー！」

杖の先端に光が集い、爆発したような轟音を立てて放出された。その空色の砲撃を見向きもせずに駆け抜け、ビルの間へと入る。

「逃がすかー！」お前は確実に殺す！』

そう叫び声がしたかと思つと、後ろから先程も聞いた空氣を切り裂く音が。

「なんだよクソッ！」

隆矢は体を反らし、掠りながらもなんとか躱す。掠つた箇所からは血が流れていった。

(非殺傷設定とかいう便利なものはどーしたー？野郎、本気で殺しに……！)

その理由を考える間も無く、第一陣がやって来た。
それは、空色の刃の雨。

「下手な鉄砲數打ちや当たる、かよー。」

上から降り注いで来るその死の雨を見て、隆矢はそう叫んだ。

空中で加速した刃は、出鱈田に降り注ぐ。
だが路地裏という狭い空間を疾走する隆矢にとっては、点ではなく
面の攻撃に近い。

だが隆矢は構わず駆け抜け
る。
己の勘と力を信じて。

「ハア……ハア……さすがに、一回死ぬのはお断りだ……」

隆矢はビルの壁に寄りかかってそう呟く。

その身に纏う学生服はボロボロ。

だが致命傷は受けなかつたのか、擦り傷程度の血しか流れていない。

「しつかし、どうする? これ、結界とかいつのだろ? ……?」

空を見上げると四角に切り取られた空の風景が見える。
氣味の悪い色を放つ空。

隆矢は考える。

自分は魔法が使えない。いや、魔力はあるのかも知れないが、それ
を使う方法がさっぱり分からない。

「銃に無手で戦うようなもんだしなあ……しかもバリア付きの。戦
車か」

戦車。言い得ている。

戦車相手にじうじうして武器も無しに一人で戦えといいつのか。

「あーー！俺に御神の才能があれば……んつ？」

頭を抱えて自分の才能の無さに嘆いていた所で、ふと何か光るもの
が視界に入った。

隆矢は釣られるよつに立ち上がり、それを拾つてみる。

「……ペンダント？」

それは剣の形のペンダント。

黒い紐で括られていくそれは、どことなく不思議な印象がある。柄の部分には黒いダイヤみたいな物が付いていた。

「誰かの落し物か？」

そんな暢気なことを考えたら、

目の前に突然、空色の球体が現れた。

「なつ！？」

当時隆矢は知らなかつたが、その男は転送攻撃が出来る術者だつた。そしてその球体は、一撃で隆矢を殺すことが出来る攻撃。

(しまつ)

そして硬直して動けない隆矢に魔力弾は迫り——

『Auto? Protection』

突然現れた半透明の黒い壁に弾かれた。

「……はつ？」

死の危険から突然解放された隆矢は間抜けな声を上げ、手元のペンダントを見る。

チカチカと、黒いダイヤの部分が光っていた。

『防衛術式発動確認。自動で「ソードソウル」、起動します』

「起動？おい、まさかこれ――」

『Set Up』

隆矢は最後まで言い切ることなく、渦巻く黒い光に全身を包み込まれた。

彼は現実の認識を手に入れ、世界に生きる。
そして今、魔導の道へと足を踏み入れた。

第一話 彼が掴み取ったもの（後書き）

早いですが、第一話投稿しました。

隆矢の設定としては頼れる思い切りのいい（バカとも言つ）兄貴、です。

では。

PS 実はちょっとずつ修正しながら載せてたり……

第一話 魔導士？俺が？

第一話 魔導士？俺が？

光が収まつた後、そこに居たのは姿を変えた隆矢。

その身は黒い黒いコートを羽織り、中は銀色の防具や装飾が為された若者のような服。

「おーおー……」都合主義にも程があるだろ……

苦笑しながら、隆矢は呆れる。

これは、正しくデバイス。

手に持つ機械仕掛けの太刀を通して伝わって来る。

「これが、魔力か！」

体が、軽い。

手に持つ一本の太刀を軽く振つてみると、空気を切り裂く音。感覚は真剣と同じ。だが、恐らく、

「……いける！」

この力があれば――――

「デバイスだと!?」

サーチャーから映し出される画像を見て、少年は叫んだ。

その半透明の画像には、隆矢がバリアージャケットを身に纏つたまま走り出す映像がリアルタイムで映っている。

「チツ！」

少年は舌打ち。だがその舌打ちには殺すのに失敗したという苛立ちだけでは無く、「主人公」という立場への妬みも含まれていた。

「デバイスを偶然手に入れただけの素人が……！」

ギリッ！と歯を食いしばり、彼はビルの屋上から飛んだ。

「来たか！」

キィイイイン！といつ空気を切り裂いてやつて来る音を聞いて、隆矢は立ち止まる。

道路の真ん中で太刀を構え、上空を見上げる。

「セイバー・レイン！」

敵の姿を捉えた瞬間、空色の刃が向かつて来た。
その面をゆうに超える刃を見る。

「……」

冷静にただ冷静に見続ける。
そして、後十メートルといった所で、

「ふつー！」

息を一息吐いて、動いた。

刃どうしの隙間は小さく、人が一人通れるか通れないかといった所。
だが、隆矢はその隙間を利用し、躰す。

「ふつー！」

太刀で弾く、

「ラアッ！」

足を動かす、

「ツ！」

体を重心をズラさずに反らす、

「上へ！」

空いている左手で横合いから弾く

己の全てを利用して隆矢は、

死の雨をかわし終えた。

辺りのアスファルトはボロボロのボロボロ。

大地には至る所に空色の刃が突き刺さつてあり、ゆつくりと空気に

溶けるように消えてゆく。

それを見ずに、隆矢は異色の空を見上げ、

「あそこか……！」

敵を見た。

先程の逃走中、今の魔法の後、敵は攻撃して来なかつた。つまり、何らかの理由で今は攻撃出来ない。

此方を啞然として見ている少年を見て隆矢は確信した。

（でもビリする？俺は空なんか飛べないぞ？）

魔力を使って身体能力を強化するのは感覚で分かつたが、魔法を発動する方法がさっぱり分からない。

先程からデバイスがうんともすんとも言わないことから、多分これはレイジングハートのような自動で魔法を使ってくれるタイプでは無いのだろう。

「……あつー！」

隆矢はふと、妙案が閃いた。

「バカな……！あれを躲すのか！？」

少年は空中であり得ない物を見たような顔をした。
だが彼が幾ら否定しようとも、彼の最高レベル殲滅魔法がかわされた
事実にかわりは無い。

「いくら追尾機能が無いとはいえ、デバイスがあるとはいえ、死ぬ
のが怖く無いのか！？」

一度死んだ少年は、そう叫ぶ。

彼は知らない。隆矢は死ぬのが怖い訳では無い。

死ぬのが怖いからこそ、立ち向かうのだ。

そんなことをこの世界を「現実」と思っていない少年が理解できる
訳が無く、そつこつしている間に、

「つー？何だ！今度は一体何を……！？」

巨大な魔力のうねりを感じ、少年は二十メートル先の隆矢を慌てて見る。

隆矢は太刀を腰だめに構え、魔力を収束させてゆく。

「あ、あああああ……！」

その膨大な魔力と、隆矢の覚悟を決めた「戦いの目」に射抜かれて、彼は逃げることに決めた。

「は、早く！早く動け！」

『残り十一秒』

先程のセイバー・レインは、彼が放てる最高の殲滅魔法。

だが、その威力と魔力ゆえに、彼のデバイスは一定時間停止してしまう。

負荷によるオーバーヒート。

魔力に物を言わせてちゃんと訓練を積まなかつた彼の末路がこれだ。

「う

そして、

「うわあああああああああつー！」

隆矢の手から放たれた黒い何かが、少年を撃墜した。

ドオオオオオンッ！と自分の攻撃が爆発したこと、隆矢は冷や汗を垂らしながら呟く。

「えっ？ 爆発した？ 魔力込めただけなのに？」

彼があこなつたのは、魔力を大量にこめた太刀をぶん投げた、ただそれだけ。

しかし実は魔力を込めるだけで無く収束したため、衝撃とともに弾けて爆発したのだ。

そんなことを知らない隆矢は慌てて墜落した少年の元へと走る。近くに太刀が落ちて有つたので拾つて見るが、どうやら壊れてないようだ。

「あぶねえ。弁償とかする羽目になつたらどうしようかといつも無事みたいだな」

チラッと倒れている少年を見て、隆矢は生きていることを確認した。死んでいたらいくら正当防衛とはいえ、後味が悪過ぎる。

「……？あれ？」

ふと、隆矢は辺りを見渡し、疑問に思つた。

「なんで結界が壊れてないんだ？」

そう、結界が壊れていないので。

知識はつゝ覚えだが、術者を倒せば脱出できるのでは無かったのか？

「一体…………どうこう事だ？」

そう、隆矢がポツリと呟いた瞬間。

「自分が結界の維持を強引に引き継いだんですよ」

「つー?」

突然の第三者の声。

それを聞いて隆矢は咄嗟に後ろを向く。

そこにいたのは一人の少年。

年は十歳程度だろうか? 青の髪に、緑色の瞳。隆矢のような固めのコートでは無く、柔らかそうなコートを身に纏つた彼は、まるで魔法使いのよう。

いや、魔法使いなのだろう。

その手には、銀色の刀。

「……お前は」

「貴方が今持っている『バイスの開発者』です」

その言葉を聞いて、思わず隆矢は物言わぬ魔導の刀を見る。

「何処かで落としてしまったんですが、まさか貴方に渡るとは……」

「お前は俺の事を知つていいのか！？」

「ええ、よく知つてます」

「ええ、よく知つてます」

その言葉に、隆矢は刀を強く握り締める。

だが、

「例えばカレーを食べる時にかき混ぜて食べる」ととか

「別にいいだろうがあああああああつー？かき混ぜなきや味が均等にならねえだろー！？」

46

何か、シリアスな雰囲気がイキナリぶち壊された。

高めていた魔力をツッコミのせいで霧散をせ、ゼニゼンと隆矢は荒く息を吐く。

「く……本当にお前なんだよ？」

「そうですね。自己紹介をしまじょうか

そう言って、彼はその無表情に近い顔に、少し笑みを浮かべて言った。

「始めてまして。ミッドチルダ出身の転生者兼、アリサ達の友人であるハル・フォーマスです」

「転、生者……だと？」

隆矢は驚愕の表情を浮かべる。

自分以外に、転生者が居るなどと考へた事が無かつたからだ。
そんな驚愕の表情を見て、ハルは、

「以後、よろしくお願ひします」

妹の友人としての挨拶を述べた。

彼は出会い。

この物語と共にやく事になる仲間と。

第一話 魔導士？俺が？（後書き）

新たなオリキャラ、ハルの登場です。
一応、オリキャラ一人一人にエピソードがあるので楽しみにして貰えると嬉しいです。

第三話 置かれた状況。そして……

第三話 置かれた状況。そして……

「お邪魔しまーす……」

「早く来て下さい。時間が時間がですし」

隆矢は急かされつつ、靴を脱いで上がる。

板張りの床が隆矢の体重を受けてギシギシと鳴った。

外は夜。今隆矢が居るのは古い木造建築の屋敷だった。

日本ならではの木の家が放つ古めかしい雰囲気を感じながら、隆矢はここに来ることになつた先程の事を回想していた。

「俺の他にも、転生者が……？」

「例外が自分だけだと思ってました？ だとしたらまずその認識を捨てることです」

隆矢の呟きに律儀に答えるハル。

彼の言葉には経験したかのような響きが籠つていた。
それを聞いて、チラリと倒れている少年を見る。

「まさか、こいつも……」

「百パーセントそりでしちゃうね」

そう言つた後、ハルは異色の空を見上げ、隆矢に提案した。

「結界もそろそろ限界ですし、自分の家に来てくませんか?」

「……俺がその提案を断つたら?」

隆矢は太刀を握り締め、警戒しながら返す。

目の前の少年を、隆矢はまだ信用していない。

そんな隆矢の警戒丸出しの態度にハルはハアツ、とため息を吐き、「自分としては来て欲しいんですが……デバイスの件もありますし。まだ試作品ですから、ソレ」

スツと弓を持つていない方の手を上げ、隆矢が持つてているデバイスを指差した。

隆矢は先程のぶん投げ攻撃を思い出し、タラーと冷や汗を流す。

「……えっと」

「先程無茶したようですね。フレームがボロボロですよ、それ」

「……マジか?」

「マジだよ」

素であるハルの言葉を聞き、隆矢は冷や汗が止まらない。

「ど、いう訳で早く整備したいので来てくませんか？デバイス高
いんです」

「……はい」

隆矢は頷くしか無かつた。

「全く……自分の力が大きければ大きいほど自分の武器にかかる負
担が大きいことくらい、分かるだろ？……」

「いや、あの。面白無いです、はい」

ハルの素での説教を聞き、隆矢は頭を下げる。

見た目九歳の少年に頭を下げる十四歳とは、中々シユールな光景だった。

「……これでよし」

ハルはそう言って宙に浮かばせていたモニターを閉じる。それと同時に黒いダイヤがついた剣のペンダントが出現。ハルの手に収まった。

どうやらメントナンスが終了したらしい。

「はい。どうぞ」

「あ、ああ。って、俺が持つていていいのか?」

自分に向かつて放り投げられ、隆矢はしつかり受け取るが問い合わせる。

これはハルの物なはずだ。渡していいのだろうか?

その言葉にため息を吐きながらハルは返す。

「自分が持つていても意味がありませんよ。そのデバイスはすでに貴方をマスターに認めてしまっていますから。全く、オートガード機能用のAIが誤作動を起こすとは……」

「?と、とにかく。これ貰つていいのか?」

後半の言葉の意味がかなり理解不能だったが、とりあえず「テバイス
を貰つていいのか聞いて見る。

ハルはそんな隆矢に顔を向けてニコニと笑い、一言。

「出世払いな

「あつ、さいですか」

「で、教えてくれんだろ？組織とやらこいついて

隆矢は本題を切り出した。

そう、ハルの家に付くまでの短い間隆矢は聞いたのだ。
組織と。

あの自分を襲つた人間は組織の下つ端だと。

「まあ簡単に纏めると、一つの団体、ギルドがあるんですよ」

「ギルド?」

「ええ。『転生者で構成された』

「つー?」

その衝撃の言葉に、隆矢はただただ驚く。
よもや、組織を構成できる程転生者達が居るとは思わなかつた。

「まあ、自分や貴方のように原作に出た人間に接触した転生者は少ないようですが」

「……で、なんでそれが俺が襲われる理由になるんだ?」

「それは『黒』にとつて貴方が危険だと判断されたからですよ

「黒?」

色の名前を呟き、隆矢は頭を傾げる。

ハルは隆矢の疑問に気がつき、丁寧に説明を始めた。

「黒というのはギルド『黒の団』ブラック・パーティの略称です。ちなみにもう一つは『白の団』ホワイト・パーティ、通称白と言われていますね」

「黒に白か・・・・まるでチエスだな」

「それぞれ特色がありまして。白は量より質。黒は質より量。そして何より基本が違う」

「基本?」

「ええ……つまり、

原作に関わるか、原作に関わらないか

「なるほどな。原作に関わるひとする黒にひとつや、俺みたいな不確定要素は消し去りたいってか」

「白は穩便ですからね。貴方が異質の存在でも殺そうとは考えてませんよ」

白と黒のことのある程度聞いた隆矢はふむふむと納得。

つまり、白は原作になるべく関わらず、穩便にことをすませようとしていく、黒は原作を変えるべきだと関わるのを選んでおり、過激

だといふこと。

実際、今まで黒による介入が無かつたのは白が邪魔をしていてくれたかららしい。

だがもう一つ知りたいことがあった。

だから、隆矢は尋ねてみた。

「なあ、お前はどうちなんだ？」

まあ、答えは分かつていたが。

「どうちでもない」

素で返つて来たのには、少し驚いたそつだ。

「……ふう」

家の自分の部屋で、隆矢は田の前に浮かぶモニターから顔を上げる。魔導士として少しばかり勉強したら、ということでハルに貰った資料を読んでいたのだ。

恐らく、また戦うことになるからと。

「……魔導士に、白と黒か。全く、面倒な事で」

だけど、まつ、なんとかなるだろ。

そう外を見ながら呟いた隆矢の言葉に、少しだけ首に掛かったソードソウルが反応した気がした。

次の日。

「隆矢、何か有ったのか？」

「んつ？まあ」

朝の食事の時間。

隣に座つた恭也から心配されながら、隆矢は箸で漬物を挟む。

「そんな大したことじやないから気にしなくていいぜ。……おっこらなのは。お前なんだその顔」

ジトーとした視線を向けつつ、隆矢は前の席に座る頬に手を当てて驚愕の表情を浮かべた妹に声をかけた。
その妹たるなのはは震える声で、

「お、お兄ちゃんに恼み事……ー？」

「我が妹！なんだその空から槍が振つてくる的な表情はぶつー？」

「食事中に騒ぐな」

ゴンツ！と拳骨が隆矢の頭部に大命中した。

隆矢は結局、恭也の一撃のせいで朝食を半分しか取れなかつたそくな。

それを見ていつもの事だとスルーする高町家の面々。
食事中のマナーが壊滅的な高町隆矢だった。

学校終わりの帰り道。

夕暮れの光が照らす中、隆矢は家への帰路についていた。オレンジ色に顔を染めながら、隆矢は呟く。

「ああ……夕日の光が暖けえ……このまま日が沈むまで浴びてい
てえ……」

完璧へにや、となつてゐるが無理も無い。

彼にとつて今や夕日はこの世のどんな物よりも、精神が癒されるものだから。

昨日は曇りで見れなかつたといつのもあるが。

「あーあ。でもなあ……」

アスファルトの地面を踏み、隆矢は立ち止まる。
そして、

「そりもいかねえみたいだな。なあ、そこの奴」

「そうだな。諦めてくれ」

後ろを向いた隆矢の目に映りしは、黒髪黒目の中年。歳は十六程度。
背もそれなりに高い。

その目は真っ直ぐに、隆矢を見ていた。

「封時結界、展開」

彼がそう呟いた瞬間、世界の風景が変わる。
色が変わり、灰色の世界へと。

「ソードソウル！」

『Set Up』

隆矢はソレを見てデバイスに呼びかけ、瞬時にバリアジャケットを纏つた。

予想は、していた。

何せハルが言っていたのだ。

下つ端の次は恐らく本氣で殺しに行くと。

「悪いな。恨みは無いんだが……命令には従わなくちゃならない」

そう言つて青年を薄い青色が包む。

光が消え去ると青年は姿を変えて立つていた。

黒の長袖ジャケットに、黒のジーンズ、黒のブーツ、灰色のシャツ。所々に銀色の獅子飾りがついている。

そして肩にかつぎしは、鋼の刀身に巨大な鋼のリボルバーがついた、奇形の剣。

(なんだ、あの剣……どちらにしろ、雰囲気が只者じゃない)

「……黒刀召還」

隆矢がそう呟くと、ソードソウルを持っていない方の手に、黒い光の剣が出現する。

昨日の夜に覚えた魔法。隆矢は一刀流なのだ。

こちらの方が闘いやすい。

「じゃあ……行くぞ！」

「ツ……！來い！」

「じゃあ……行こう！」

タンツ！と敵は地面を蹴り、隆矢に迫る。

上段から真っ直ぐに振り下ろされたそれを、隆矢は二つの剣をクロスさせてその間にぶつけさせた。

「ぐつ！」

「防ぐか。なら」

その攻撃の重さに足が地面に少しめり込むが、敵は容赦なく追撃。

ガーンツ！！と銃声にしては余りにも大きい音が響いた。

「はつ！？」

銃声と同時に、自分の手に伝わった膨大な振動に隆矢は声を上げ、後ろによろめく。

その隙を見逃さず、敵は奇形の剣、ガンブレードを横に振り抜いた。

「ぐうー。」

慌てて隆矢はしゃがみ、そのまま後ろに転がって立ち上がる。だが、敵は本当に容赦が無かつた。

「トリプルショット、ショートー！」

ガンブレードを空で薙ぐと、敵の周りに三つの光弾が出現し、それがかなりの速度で隆矢に迫る。

その直線的に迫るレーザーを隆矢は上に思いつき飛んで避けるが、

「遅い！」

「なつー？ぐおつー！」

突然、自分より高く敵が出現し、隆矢は大地に叩き落とされた。

今、隆矢は十メートルは上に飛んでいた、なのに彼はすぐにそれに追いかいたのだ。

轟音が響き、アスファルトが砕け、砂埃が舞い上がる。

「があつ……！」

「咄嗟に剣を犠牲にして衝撃を防いだか

大地を転がりながら隆矢は血を吐き、苦痛の悲鳴を上げる。側には、刀身が半ばで折れたデバイスが転がっていた。

(マズ……レベルが、違すぎる………)

毎日剣の鍛練をしている隆矢には分かる。

目の前の男は、余りにも昨日の人間と強さが違うと。

「俺の名前はレオ・レイヴェルト。お前をこれから黒の団に連行する最低最悪の人間だ」

自嘲するように、青年、レオは地面に倒れ伏す隆矢にそう告げる。隆矢は地面に指を引っ掛けながら、顔を上げて彼の顔を見た。

その顔は色んな思いが入り混じった、負の表情に染まっている。

「そんな、顔、する、くらいなら……」ん、なことやつてんじゃ、ねえよ…」

「悪いな。そうゆう訳にはいかないんだ」

下から睨みつけながらの声を聞いて、彼、レオは苦笑する。

そして、ガンブレードを振り上げた。

「すまない」

「アイヴィー・ラッシュ！」

「ツー？」

だが、その奇形の剣が振り下ろされることは無かつた。

彼の立つている地面がボコッ、と盛り上がり、何かがレオに絡みつこうと地面から飛び出す。

ソレをレオは後ろにステップを踏んで避ける。

かわした何かは、金色の魔力で構成された魔法のトゲ付きツタ。見た目からしてそれはレオを捕まえるために放たれた魔法だと分かる。

「たあああああつ！」

「むつ！」

更に追い討ち。

後ろに下がったレオに向かつて振り下ろされたのは片刃の大剣。その大剣をレオはしつかりと受け止める。

ガギーンツーと鋼どうしがぶつかる鈍い音が響いた。

「ふつ！」

レオはガンブレードのトリガーを引く。

瞬間、シリンドラーが回転し魔力の爆発による銃声が鳴つた。

その衝撃で刀身が振動する。

ソレを知っていたのか、大剣を振り下ろした人物は鍔迫り合いを止

め、後ろに地面を蹴つて飛び、隆矢のすぐ隣に着地した。

「大丈夫？えつと、高町、隆矢、だっけ？」

その疑問に答えつ隆矢は痛みを堪えて立ち上がる。

「ぐつ……あ、ああ。あんた等は、白か？」

「そうよ。白の団」

隆矢はしつかりと立ち上がり改めて二人を見た。
大剣を振り下ろした人物はオレンジのツインテール、青い瞳の少女。
歳は隆矢と同じくらいか。
身の丈以上ある大剣を両手に掴んで構えている。

もう一人、最初の魔法を放ったのも少女。ただし、先程の少女より
は小柄だ。

額にゴーグルを付け、左右非対象のバリアジャケットを着ており、
髪は茶色で瞳は少し暗い緑。

そして恐らくデバイスであるつ、帯のような物が彼女の周りをふよ
ふよと浮いている。
だが少しばかり様子がおかしい。

レオを睨み付けているのだが、その目は、少し、泣きそうになつて
いた。

それは小さなものだが、隆矢は分かった。同じような瞳を、何回か見た事があるから。

「アンタ……！」

「リタ……！」

その少女の名前であろう。レオは、彼女に声を出す。だが、彼女は怒鳴り返した。

「黙れ！アンタなんか、アンタなんかあーー！」

「リタ、落ち着きなさい！」

大剣を持つ少女に言葉で止められ、少女、リタは口を噤む。それを確認して、彼女は前に向き直る。その目は正しく戦士の瞳。

「さて、レオ。色々聞きたいこともあるし、一緒に来てもうおつか？」

「残念ながら、それは無理だ」

その言葉を聞いてレオは悲しそうに苦笑して、

瞬間、彼の足元に白い魔法陣が展開された。その魔法陣を見て大剣を持つ少女は叫ぶ。

「転送魔法！」

「じゃあな。次は合わない」と願う

「逃がすか！」

リタが緑色の帯をひつ掴み、鞭のように振り回した。それに反応して彼女の前方に金色の魔法陣が展開され、そこから光の龍を模した光線がレオに向かって放たれる。空気を切り裂き、それはレオに牙を突き立てた。

ズドオオオオオオンッ！

直撃。

轟音と同時に、アスファルトが更に砕け散り、その下の大地のせいでの大量の砂埃が舞う。視界が遮断され、向こう側が分からなくなつた。

「わふっ！ ゲホ、ゲホ……やつたのか？」

隆矢はその煙を払い、二人に問いかける。

一人は首を横に振り、もう一人は忌々しきに舌打ち。

砂埃が消えたそこに、レオの姿は無く、ただボロボロの大地だけが存在した。

「助けられたのは二度目だな、ソードソウル……」

結界が解けた街で、隆矢は近くのビルの屋上にてそうデバイスに言う。

手に収まっているデバイスはそれに答えない。
今は自動修復中だからだ。

「……ワリい」

最後にもう一回謝つて、ポケットに仕舞つ。
そして隆矢は後ろを向いた。

そこでは先程の一人が宙に浮かぶモニターに向かつて何か言つている。

「ちよー本氣ですかー?」

『ここまで知られているのだ。なら協力して貰うべきだと思つぞ』

「まあ、アンタが言つならいいんだけどね……本氣?」

『勿論

何やら論議しているようで、結局、ツインテールの少女が折れたらしい。

彼女はため息を吐いてモニターを閉じた。

そして、再度此方を見てハア、とため息を吐く。

それにすこしづかり隆矢はイラッと来るが、ガマン。

「ほらアスカ。ちやつちやとやるわよ

「分かつてゐわよー……『ホン。えーと

リタに呼びかけられ、彼女は顔を引き締める。

一度咳払いした彼女は、

「白の団副隊長、アスカ・ウェスペリアです。高町隆矢、貴方を白の団の居城に同行を願います」

「副隊長……？」

そう、名乗った。

「つて、こんな感じでよかつたけ？」

「ちょー!? 今シリアスな雰囲気だつたのにー!」

・・・・まあ、彼女じことこいつで。

彼は向かう。

二つの色の一つへと。

第三話 置かれた状況。そして……（後書き）

さて、ここまでが既に書いていた物です。

ついにあのシリーズのキャラが登場。

というより、ぶっちゃけオリキャラ作るの疲れただけだったり（汗
レオも前作つたキャラですし。

あつ、リタとか知らない人はオリキャラ感覚でお願いします。

PSリタとレオに恋愛要素あります。レイリタ好きの人、すみませ
ん。

第四話 白の団のお願い

第四話 白の団のお願い

ヒュウン、と転送魔法独特の効果音が響く。

その効果音を生で耳に入れ、隆矢は少しばかり感動しながら辺りを見渡す。

周りは白い鉄に覆われており、所々が光っていた。

「ここが私達の本部。第九十管理外世界の地下に存在するよ」

転送装置から降りながら、アスカは此方にそう言つてくれる、

隆矢はそれにへー、と返して転送装置から降りた。

確かに窓が一つもなく、地下だと分かる。

そんな風に立つたまま眺めていた隆矢が邪魔だつたのか、リタが何かを振るつた。思いつきり。

「ほり、サッサと行くわよ」

「ぐぼつー。」

身長百五十センチぐらいしか無いはずのリタの小柄な体から繰り出された一撃は、鍛えられた隆矢の腰にかなりのダメージを与えた。何故なら、

「おい待て！本で叩くな本で！」

そう、本でぶつ叩いたからだ。

鼻を不機嫌そうに鳴らすリタの右手には、辞典のような分厚い本。ソレに対しての隆矢の抗議をスルーし、リタは本をもう一度掲げる。そして齧る。

「もう一発いかれたいの？いいからサッサと来なさい」

「……はい」

皆さん、本の角で人を叩くのはやめましょう。
本も鈍器になります。

隆矢はそんな警告の声を心中で呟いたそつた。

転送装置が設置されている地下一階の部屋から出た三人は、白い鋼によつて作られた廊下を歩いて行く。

すると、二十メートル程先の角から誰かが出て來た。

「おっ、帰つて來てたのか」

「お帰りなさい、リタ、アスカ。えつと……」「隆矢よ」隆矢さん。初めまして、私エステリーゼ・ヒュッセラインって言います」

「あっ、どうも。高町隆矢つて言います」

その向かい側から來たピンク色の髪と緑色の瞳の女性、黒い髪の男性に声をかけられ、隆矢は挨拶されたので、慌てて挨拶し返す。

「ふーん……ヒュッセラインって聞いて驚かないでつゝとは、やっぱ管理外世界の人間か」

「…………？」

意味深氣な男性の言葉に、隆矢は首を傾げるが、突然、それを遮るように慌てて女性が話し始めた。

「あっ！えっと、その、気にしないで下さいーそれと、私のことはエスティルと呼んで貰えるでしょうか？」

「ああ、分かった。さんはいらないか？」

「はい」

「んじゃエスティル。よろしく。で、そつちは？」

何だか話を反らかうと頑張っていたので、隆矢は苦笑しながらそれに乗つてやる。

名前を尋ねられた青年は長髪を揺らしながらフツ、と笑い名乗った。

「俺はユーリ・ローウェルだ。お前、隆矢だったか？結構面白そうだな」

「やうか？でもユーリ……さんは？」

「いらっしゃいよ」

「ヨーリって強いだろ。かなり」

そう、ヨーリを最初に見た隆矢の感想がそれだった。
身のこなしがいい、服の隙間から見える筋肉のつき方といい、歴戦
の剣士を感じさせる。

へえ、とヨーリは感心してからじろじろと隆矢を見ながら楽しそう
に、

「お前も得物は剣っぽいな。後で模擬戦でもするか？」

「ああ、是非頼む。とある奴にぶつ飛ばされたばっかだしな」

そんなやりとりに、

「オイコラバトルジャンキーども。早く隊長の所に行きたいんだけ
ど?」

アスカがこめかみをひつかせながらそう言うのだが、男一人は会話
に夢中で聞いていない。しかも内容は剣の事ばかり。
その姿にハア、とアスカはため息を吐く。

「男つてバカばっか……」

「全力で同意するわ……」

「ふふふつ……そついえばリタ」

「んつ？何よエステル？」

呆れて頭を抑えていたリタだが、エステルからの真剣味を帯びた問い合わせに、茶色の髪を揺らしながらエステルの方に顔を向け、言葉を待つ。

その視線を受け、恐る恐るといった感じでエステルの口が、言葉を紡いだ。

「レオは、どうでした？」

瞬間、空気が凍つた。

リタの表情が固まり、冷たい無の表情に染まる。

だが、その前に悲しそうな顔になつた一瞬を、ここにいた四人はハツキリと見た。

リタはエステルから視線をそらし、顔を廊下の先に向ける。

「別に、あんな奴のことなんか知らないわよ……」

「リタ……」

「アスカ、悪いけど私部屋に戻るわ」

そう言い残して、リタはテクテクと歩いて行く。その小さな小さな背中を悲しそうに見る四人。だがその内の一人が、

ダンッ！…と壁に右拳を叩き付けた。壁が振動し、僅かだが床も揺れる。

叩き付けたのは、アスカ。

その表情は怒りに染まっていた。

彼女は絞り出すように声を吐き出す。

「アイツ、リタをあんなに悲しませて、何がしたいのよ……！？」

「落ち着け、アスカ。俺たちがどうこう言つてもしゃーねえよ

「分かってるけど……！」

ユーリの言葉に、アスカは歯を食いしばる。
そんなアスカに声をかけたユーリも僅かだが、怒りを見せていた。

「……なんか、複雑な事情があるのか？」

「私の口からは、ちょっと……」

「そつか……」

エスティルも暗い顔をしており、隆矢も無理に聞こえとはしなかった。
隆矢は思い出す。

リタを見た時のレオの顔を。

「あの男は何してんだ……」

あんな、小さな子放つたらかして。

思い出したレオの顔は、リタと同じように悲しみに染まっていた。

アスカの声に反応し、扉の上部についているスピーカーから音声が返ってきた。インターほんのような仕組みになっていたらしい。

『待っていたよ

「隊長、高町隆矢を連れて来ました」

地下二十五階、最下層。
そのエリアにたつた一つだけ存在する部屋の前に、隆矢は立つていた。
扉は茶色で木製のように見えるが、触ると近くの壁に使われている金属と同じだと分かる。

「違いない」

「やつちの方が“らしい”でしょう」

「一番地下にあるのが……」

「いいよ」

ガチャ、と扉のロックが外れる音が聞こえ、アスカは扉の出っ張りを掴んで押した。

部屋の中は一言で言うならどこかの社長室のよう。茶色のカーペットが敷かれた床に、茶色の大きなデスク。そこに座っていたのは一人の女性。

年は二十代後半か？

銀色の輝かんばかりの髪を持ち、金色の瞳を部屋に入った二人に向ける。

正しく絶世の美女。加えて何処か鋭さを感じさせた。

その一恐らくアスカが隊長と言った人物なのだろうーを見て彼は思わず一言。

「女性、だつたのか。てつきり隊長つてくらいだからゴツイ男かと
……」

「そちらの方がよかつたかい？」

「いや、いひちでいい」

投げかけられた言葉に、隆矢は苦笑する。

確かに驚いたは驚いたが、話をするのに不便さは無い。

その返答を彼女は聞いて「そうか」と返し、ふと、一人を見て足りない人物が居るのに気がついた。

「リタは？」

「部屋に……」

「ナハカ……やはつリタには」の任務は不味かつたか

アスカからの報告にふう、と悲しそうにため息を吐いてから、彼女は隆矢に顔を向ける。

表情はにこやかで、そこいらへんのモデルよりも遙かに美しい笑顔。

「始めてまして。私は白の団の隊長を勤めさせてもらっている、フォース・ラインベルと言ひ。フォンと呼んでくれ」

「うーんど、一応俺も。高町隆矢。海鳴市に住む中学三年生だ」

恐らく自分の名前は知ってるんだねと思いつつ、隆矢は自分のことを述べる。

彼女、フォンはふふつ、と小さく笑い、

「長い話になる。「一ヒーでも飲むかい？」

「あっ、貰います」

隆矢は即答した。

貰えるものは貰つておけ。

隆矢の好きな言葉の一つである。

「さて、どこから話せばいいのやら……そうだね、取り敢えず現在の現状から語ろうか」

「お願いします。ハルに聞いたとはいって、まだ分からぬことだけなんで」

「ハル？ ハル・フォーマスかい？」

黒色のソファーに座っていたフォンは驚きからか、身を乗り出していく。

隣に座っているアスカも、驚きに目を見開いていた。
そんな二人の姿を見て隆矢は首を傾げる。

「ハルが何か？」

「いや、君はもう主人公と接触していたのか。……なるほど、君のデバイスは彼に貰ったのかい？」

「えっと、出世払いで」

あはは……と失笑しながら隆矢は言う。
ちなみにデバイスの値段はとても高い。詳細を言いたくないくらい

に。

ふう、と一息吐いて、彼は今の言動の気になつた部分を指摘する。

「主人公って？なのはのことじや？」

「いや、その主人公では無い。転生者としての、主人公だ。そこには君も含まれる」

「俺も？」

「アンタ達だけなのよ」

隆矢が自分を指しながら首を傾げ、アスカが隆矢の前にモニターを展開させながら言つ。

俺達だけ？と更にクエスチョンマークを浮かべる隆矢に、アスカは説明を続けた。

「海鳴市に存在する転生者はアンタを含めて三人。そしてその三人は既に原作に登場する人間と関わりがある……」

「あー……」

(そりいえばハルの奴、アリサ達の友人とか言つてたなあ)

アスカの説明を聞きながら、隆矢は自分の持つ情報と照らし合せた。

そして、もう一人は知らないけど、と画面を見ながら隆矢は思考する。

そこには自分と、青髪緑目のハル、そして黒髪赤目の中十歳くらいの少年が映っていた。

「これまで原作に關わるうとする転生者は居たのだが、私達と戦つて負けたか、何か他のことが原因で接触していないんだ」

「へえ……昨日まで襲われたりしなかつたのはそのおかげか」

「やうやく」と

アスカが頷く。

どうやら自分の知らない場所で戦いはずっとあつていたようだ。
しかし疑問が一つ残る。

だとしたら何故、今まで襲われなかつたのに今襲われ始めたのか。

「で、私達のお願いは」

アスカが恐らく本題を言つたために、息を吸い込み、隆矢も押し黙つて彼女の言葉を待つ。

恐らく、今から言つ「お願い」に今の疑問も関わっているだろうから。

そしてアスカは言つ。

「アンタに、白の団として協力して欲しい」

言われた言葉は、予想通りと言えれば予想通りだつた。

「……俺に？」

隆矢がまたもや、自分を指差して尋ねる。
それにゆっくりとフォンは頷き、

「ああ、正直に言つて戦力が足りない。向こうは百人。こっちは転生者じゃないのを含めても三十屈くかといった所だ」

戦力差を言い切つてから更に、と付け加える。

「こここの所活動が活発になり始めている。恐らく近いうちに、戦いが始まるだろう。今までとは比較にならない程の戦い。いや、戦争が」

そこまで言つてフォンは隆矢の目を見る。

その瞳には意思が灯つていた。

隆矢は似たような瞳を見た事が何回もある。これは、戦う戦士の瞳。

「協力して貰えないだろうか？」

彼女はそう、何処かの漫画の主人公に言つセリフのように、隆矢に
「お願い」をした。

「で？ 結局どーすんのよ？」

「いや、だからまだ決まってないって」

地下五階。

ここに住む人間が「ホール」と呼ぶこの場所に、アスカと隆矢は居た。

アスカの問いに、隆矢は苦笑しながら答える。

結局。先程、隆矢は「考えさせて下さ」、と返答した。

フォンは分かつたと答え、しかし早めに返答が欲しいとも言った。どうやら原作が近付いて来たせいか、黒の動きが活発になっているらしい。

ホールのベンチの一つにどかっと座りつつ、彼女は隆矢をジー、と見て、自分の考えを述べ始める。

「えー？ アンタ絶対悩んだりするタイプじゃないと思つんだけどなあ……敵がいたら倒せばいい！ 的な」

「いや、いくら俺でもそれは悩むわ！ まあ、あれだ。高校のこともあるし……」

「高校？ ああ、そんなのもあつたわね。久しぶりに聞いたわ」

いやー懐かしいなー、などと語りアスカを見ながら、隆矢はふと気がつく。

(そういや、ここも転生者、なんだよな……実は中身おばさんだ
つたり

ザシユツー！

「何か言つた？」

「何も言つてねえよ！」

自分の半歩横に突き刺さった大剣を横目に見て、冷や汗を垂らしながら隆矢は必至に叫ぶ。

確かに内心では大変いけないことを考えていたが、声には出して無かつた。

女つてエスパーなのかと隆矢が思い、地面に刺さった大剣をアスカがズボツと引き抜いた頃。

『黒の団』

本部。

「……なんだ？」

廊下の一つを歩いていたレオは立ち止まり、後ろに問いかける。鋼で構成された廊下のほのかな明かりの影による死角、そこに、誰かが居た。

その誰かはフン、と鼻をならし、彼に言葉を発する。

「別に、大したことじゃ ない。ただ、惚れた女を捨ててまで寝返つた物好きな男を見に来ただけだ」

「そりゃ」

挑発的な言動にもなんら怒りを見せず、レオは短く返し、再度歩き始めた。

「……ただの肩じゃないようだな」

そんな後姿を見て、闇に隠れる誰かはそう呟き、レオとは反対側の道を行く。

彼等は迷いながらも進み続ける。
進むことが、未来への活路になると信じて。

第四話 白の団のお願い（後書き）

若干短いですが……

ここまでが書いた分。次回、リリカルキャラ登場です。

第五話 赤目の少年と隆矢の答え

第五話 赤目の少年と隆矢の答え

「じつするかなー……なあ、ソードソウル」

『貴方の思う通りに』

ストレージデバイスであるソードソウルだが、簡単な応答なら出来る。

その簡素な返答を聞き、隆矢は空を眺めた。

空は、青に染まっていた。雲一つない、青へと。

「どうするかなー……」

隆矢は再度、その青い空を眺めながら呟いた。

十月十日、土曜日の朝七時、高町家の屋根の上にて。

彼はあれから考え続けていた。
自分が取るべき行動を。

「つひ、 いつても迷うよつなことじじゃ ねえんだけどなあ……」

喫茶「翠屋」の厨房にて、隆矢は皿洗いをしながらため息を吐く。

そう、既に答えは決まっていた。

自分に力があつて、それで周りの人間を、家族を守れるといつのな

ら迷うこと無い。

由での活動も楽しそうだし、魔法の力を極める上での申し出せ
けるべきだ。

だが、

「じつやつて監に認めさせるか、だな」

そこが問題。

今から隆矢は高校に行くために色々しなければならない時期だ。
まあ、転生前は高校一年だったため、経験はあるからそこまで焦る
必要は無いのだが……

「……じひじよ」

皿をクルンと器用に指で回して、隆矢は頭を捻り続けた。

「んじゅ、上がるからー」

「あつ、隆矢、ちょっと待て」

「んあつ？」

着ていたエプロンを畳み終え、裏口から店外に出ようとした隆矢は呼び止められドアノブを掴んだ状態で体の動きを止める。

呼び止めたのは士郎。

士郎は隆矢に何か白い箱を手渡した。

「あり？ これシュークリーム？」

渡された隆矢は重さの感覚とわずかに匂う甘い匂いで中身を当てる。箱の蓋の僅かな隙間からシュークリームの一部が見える。重さからして五個は入っているだろ？

「ああ。なんでもなのはが家にアリサちゃん達を呼んでるらしいへな。持つて行つてやつてくれ」

「……？ アリサとすずかだけなら三つでよくね？」

数が合わないことに疑問を持ち、首を傾げるジェスチャーをする隆矢。

その疑問に、士郎は笑いながら答えた。

「いやな。何でも男友達一人も来るんだと」

「ただいまー」

「あつ、隆矢お兄ちゃんが帰つて來た」

「あででででーーちよ、ギブツーアリサギブギヤ あああああつー!?.」

「ギブ? 何か欲しいの? いいわよくれてやるわよ関節技をねえええ
ええええ!!」

「ア、アリサちゃん。レン君も反省してこると思つし、そのくらい
で……」

「すずか。」いつが反省をするとなど、絶対あり得ない

家の玄関に入つた瞬間、リビングから聞こえてきた声に隆矢は冷や
汗を垂らす。

なのはの声はいい。いいがあの絶叫は？

廊下を歩き終わり、恐る恐るリビングへと通じる扉を開ける。

「……」

「お邪魔してます」

「えりと、あつ、隆矢さん！」さわ

「隆矢久しぶり！！」

「あででででつーちよ、挨拶も出来ないからやめあたたたたつ！」

「……なのは、何これ？」

「えりと、アリサちゃん！」すずかりちゃんとハル君にレン君だよ

「多分最後に名前呼んだ奴が大変なことになつてゐるにはシッコ!!
入れないのな」

リビングで見たのは、テーブルの上にカップを置き此方に挨拶をして来る青髪の少年と、トテトテと立ち上がりつて駆け寄つて来た妹と、

なんか金髪の少女に海老剃り固めを決められた黒髪の少年に、それを止めようとオロオロしながらも丁重に挨拶して來た紫色の髪の少女だった。

「始めてまして、だな。俺は高町隆矢。なのはの兄だ。気軽に隆矢と呼んでくれ」

「自分も改めて。ハル・フォーマス。なのはの友人をさせて貰ります」

「俺の名前は紅宮連あかみやレンです。レンって呼んで下さい」

女子三人が隣でシュークリームをぱくつく中、テーブルを挟んで座つた三人はそれぞれ挨拶する。ちなみにレンの丁寧な口調に隆矢は少しビックリしてたり。

(……ハルはともかく、こっちのレンってのもなのはの友達だったのか……)

自分から向かつて左に座るハルから視線を外し、隆矢は右に座る黒髪の少年を見る。

年はやはりハルと同じくらい、いや同じで、ショートカットの黒髪による前髪の隙間から除く明るい紅い目が特徴的だった。

「でもなのはに男友達が居るとな」

「実際は直接なのはと友達になつた訳じゃないですよ。俺はすずか
と、ハルはアリサと友達だつた訳で」

「まあ、自分は最初は知り合ひ程度だつたんだがな……」

ハルがそう言つと、カチンー！という効果音が聞こえた気がし、

「知り合ひ程度！？アンタ最初そんな風に思つてたの！？」

「当たり前だろ？。まだ知り合つて間も無かつたといつのこ、いき
なり友人などと考える訳ないだろ？」

ガーンと突つかかつて来たアリサに、ハルはサラッと答える。
ちなみにアリサ、ほっぺにクリームが付いているが氣が付いていな
い。

「まあまあ。今は友達なんだし、世のことはいいじやないか、なつ。
なのは？」

「うん、そうだよアリサちゃん！」

うひ、となのはの満面の笑み+言葉を受け、彼女は呻きながら怒鳴

るのを止める。

確かになのはの笑顔には怒りを吹き飛ばす何らかの力があった。

「ハツハツハツ、やつぱアリサはなのはには弱いなー」

それを見越してなのはに振った張本人はカラカラと笑う。ギンツ！と不完全燃焼のアリサが凄まじい眼力でレンを睨むが、彼はそれをすすかの方に顔を向けてスルー。

「レン君、アリサちゃんが口パクで『後で覚えてなさい』って言つてるよ」

「H A H A H A H A ! 気のせいだつて……たぶん……」

「自業自得だな。諦めろ」

「底つてやつたのにそれ！？」

訂正。

完璧にスルー出来てなかつた。横目でチラチラとアリサの様子を伺つている。

(なんつーか、賑やかなメンバーだなあ……)

そんな五人の様子を、ソファーに持たれ掛けた隆矢は何処か微笑ましそうに見ていたそうな。

時間は立ち、夜。無音の世界。

そんな世界になっていた部屋に大きなあくびをする少年。

「ふわあ～あ……もうこんな時間か……」

隆矢は壁に掛かったアナログの時計を椅子の背もたれに寄りかかりながら言つ。

時計の短い針は十一を通過し、一に半分程近付いていた。

「もう寝るか……皆への言い訳どうしようかねー、本当……」

そして天井に点いた明かりを消そうと椅子から立ち上がり、壁に付いたスイッチに手を伸ばす。

白いスイッチのプラスチックに指が触れた所で、

カツン、と何か音がした。

「……？外？」

隆矢は疑問に思いながらもスイッチから手を離し、窓へと向かう。パチン、と鍵を外して開け、窓から外を眺めると、電柱の光に照らされて誰かがいた。

「……レン？」

誰かの正体が分かつた隆矢は、ポツリと呟く。

その呟きが聞こえたのか、彼は頷き、手で弄んでいた石ころをゆっくりと投げ捨てる。

カツカツ、と小さくアスファルトの地面に小石が当たった音が夜の道に響いた。

「……」

無言のまま彼はクイ、と右手を右に指す。

そしてそのまま、指した方向へと静かに、音を少しも立てずに歩いて行った。

その背中が見えなくなつてから、隆矢は自分の考えの結論を呴いた。

「……来い、つて」とか?「..

「来てくれたか。来なかつたらどうしようかと思った

レンはホッと一息つき、ベンチから立ち上がる。

その行為を黙つて隆矢は眺めていた。

二人がいるのは深夜の公園。

夜の一時に差し掛かりそつたこの時間には公園などに誰もおりず、

二人だけ。

そんな静かな雰囲気を断ち切るかのように、隆矢は問いかけた。

「どーいうつもりだ?」

「んや。ただちょっと……」

レンの言葉の途中で、隆矢はバリアジャケットを一瞬で展開。
何故か?それは、

「戦つてほしいかなって!」

「くつ!」

彼が地面を蹴つて殴りかかって来たから。

隆矢が咄嗟に目の前に出した刀身にガキン!とぶつかる拳。

「ナックル……!」

「防ぐか!なら!」

金属のグローブに包まれた右手でレンは刀身を握り締める。太刀の刀身を握られて隆矢は咄嗟に左手を太刀から離し、顔の横に構える。

その腕に、紅い羽が付いた足の一撃が来た。

レンは身長の差を物ともせず、空中でケリを放つたのだ。

ドムツ！と鈍い音が隆矢の左腕から響き、その衝撃が腕を通して隆矢の頭まで伝わる。

「……ツ」

「もうつた

グラツと、足を揺らした隆矢の太刀を掴んだまま、彼は空を“蹴る”。

「しまつ

そしてレンのその空中でのあり得ない加速エネルギーで太刀ごとぶん投げられ、隆矢は公園の森林に砲弾の様に飛び込んだ。

「一ツ！？」

隆矢は木々をへし折りながら吹き飛び、声にならない悲鳴を上げる。バキバキ！と轟音を立てながら、木が彼に当たって折れてゆき、

「ーツーーうあーー！」

途中の木に太刀を突き立てて、隆矢は止まった。

その衝撃で木が揺れ、根っこが地面から盛り上がりつて傾くが、倒れはしない。

気がつくと、公園は既に結界に覆われていた。

「つ、やつてくれんじゃねえか……」

結界が張られているのを肌で感じとりながら、隆矢は自分が飛んできた道のりを見る。

木々が折れ、その衝撃のせいで大地がえぐれているその道の様な所をレンが静かに歩いて来ていた。

姿は両手両足に金属の武具が付いており、半袖の赤いコート、黒のジーンズのようなズボン、黒いシャツ。

（あれがアーツのバリアジャケットか……どうやら殴り合いが得意っぽいな）

両手両足の光る金属を見て、レンの戦闘タイプを判断し、隆矢は右手に太刀を、左手に魔力刀を出現させ、構える。

「今のはバリアジャケットだけで耐え切れるのか……」

「うむ。まだプロテクションとか使えねーんだよー。」

多少ボロボロになつたバリアジャケットを再構成しつつ、隆矢は走り出す。

狙うは、一撃での昏倒。

「ふつ！」

右の太刀はレンの首を。
左の光剣はレンの腰を。

その真横からそれぞれ振られた攻撃は、

『 Bewegung

「遅い！」

「ぐつ！？」

高速機動魔法でいとも簡単にかわされた。しかも後ろからの後頭部への一撃。

レンの足についた紅い羽が煌めいており、手についたナックルが合成音をあげる。

「まだまだ！」

「がつー！？」

次は隆矢の顎が殴り飛ばされ、大地から足が離れて隆矢は空へと舞つた。

空気の層を突き破り、かなりのスピードで打ち上げられた隆矢は空中でなんとか態勢を立て直そうと、

ガギヤ！

「逃がさない」

「早つー！？」

出来なかつた。

昨日の戦闘と同じように上に先に回られ、隆矢は太刀を振るうが逆に掴み取られる。

掴んだレンの左手のナックルから、

『Explor...』

合成音とともに空薬莢が飛び出した。
レンが纏う魔力量が、跳ね上がる。

「カートリッジ……！？」

「リエセ」

隆矢の呟きは、

「ファストオオオオオオオオッ！！」

爆炎を纏つた右拳の一撃の前に、呆気なく消え去った。

ドゴオオオオオオオオンッ！－

明らかに人間が喰らつて無事で済むはずが無い威力の爆発が、隆矢

に直撃。

炎の魔力パンチ、指向性の爆発を至近距離でモロに喰らつた隆矢は音速を超えた速度で大地に衝突する。

公園全域の大地が揺れ、まるで隕石が落ちたかのような現象が巻き起こった。

「……終わり、か」

でこぼこの大地に、レンは着地する。

辺り全域を舞い上がった砂煙が覆い隠しているが、レンが腕を思いつきり振るうと竜巻のように衝撃波が砂煙を吹き飛ばす。

地面に出来た巨大なクレーターの中心に、黒い塊がある。

それは人。

バリアジャケットを体全体に包んだのである。

地面に這いつぶばるように倒れてよく見えないが。

「……やっぱ、アンタじゃ無理だつたか」

クレーターの端に立つてそれを見たレンはため息を一つ。

倒れている隆矢はどう見ても戦闘不能だつた。

バリアジャケットを維持しているから、まだ僅かに力があるのかも知れないが。

「……さて、後始末に移ろう」

そう誰ともなしに咳き、レンは隆矢に背を向けようとして、

「……？」

ふと、何か違和感を感じ、レンは隆矢をまじまじと見る。

(なんだ? 何か違和感が……?)

改めて一つ一つ確認してゆく。

直径十メートル程のクレーター、這いつくばつて倒れる隆矢、黒髪、地面に食い込んだ指、ダランと力が抜けている両腕、投げ出された両足……

(……?)

だだの杞憂かと思い、視線をそらそうとして、

(!?)

レンは気が付いた。

太刀が、無い。

「つー？」

ソレに気が付いた瞬間、レンは直感に従い一気に体を横に動かす。キュン！と何かがレンの居た場所を通過した。

(物質操作魔法！?)

飛んで来た物、太刀型のデバイスを見て使われた魔法が分かつた。レンはソレに驚愕して隆矢へと向き直る、

「神速」

「！？」

事なく、隆矢を田の前に見た。

レンは隆矢が氣絶した振りをしていただけと思っていたが違った。

全ては、最高の一撃を放つための時間稼ぎ。

クレーターの坂を駆け上り、隆矢は太刀を掴んで発動する。

現在放てる、最強の魔法剣技を。

「一閃……！」

正しく神速と呼ばれる凄まじい速度、人間のあらゆる限界を超えた速度で隆矢は大地を一気に駆け、すれ違いざまにレンを切り裂いた。

「……マジ、か……」

「マジだよ」

斬られた箇所、非殺傷設定の太刀が切り裂いたバリアジャケットを見ながら言ったレンの言葉に、隆矢は適当に返した。

その返答にレンは震える顔で笑い、

ドッ、と膝を付いた。

「俺の勝ち、だな」

その姿を視界に納め、隆矢は息を長く吐きながら空を見る。

空は彼が好きなオレンジでも無く、爽やかな青でもなく、黒で、黄
金の星の輝きに照らされていた。

「で？何で昨日俺を襲つた？さあ、キリキリ吐け。キリキリと」

「いやあの。その前にこれ除けてくれませんか？」

「却下」

「ですよねー……」

日曜日。

つまり次の日。海鳴にあるとある山の森の中。
そこに張られた小規模の結界の中で隆矢はレンを尋問していた。
ちなみにレンは地面に素足で正座で太ももの上に「百キロ」と刻まれた金属の四角い物体が置かれている。
隆矢がどこから持ってきたのかは不明。

「痛い……」

「此方とら一日待つてやつたんだ。これくらいで済むなら安いもん
だろ。さあ、キリキリ吐けキリキリと」

ソードソウルの太刀の柄部分をレンのホッペにめり込ませる隆矢。
その表情は不機嫌さ全開で、レンが「痛！？ちょ、地味に痛い！？」
と言つても手を緩めるどころか更に強めている所から、不機嫌さが
窺い知れる。

「えつですね。自分の所にも白のスカウトが来たんですよ

「ほうほつ。それで？」

「それで、高町隆矢って人が協力するかも知れないからと言われて、一度会つてみようかと……」

「……で？」

隆矢はめり込ませるのを止め、レンの言葉を待つた。
レンもいい加減面目になつたのか、真剣そうに口を開く。

「だから、会つてみてそれだけじゃどんな人間かハツキリしなかつたから戦つて確かめようと……」

「……もう少し穩便な方法は無かつたのかよ……」

隆矢は深いため息を地面に向かって吐く。

確かに、どんな人間が見定める方法の一つに戦いという方法があるのは認める。認めるが、他の方法は取れなかつたのか。

「いや、時間も無いし。これが一番手つ取り早かつたから

「そつかい」

手つ取り早かつたからじやねえだろオイ。と内心で隆矢は思いつき

りツツ「//」を入れる。

一通り聞き終えてから、最後に、

「……んで？俺をどう思つたんだ」

屈んでいた姿勢から立ち姿勢になり、隆矢は座つたままのレンに尋ねる。

レンは百キロの重りをよいしょ、と太ももから下ろしてしつかりと立ち上がる。

そして隆矢の目を下から見て「パツ」と笑つた。

「アンタとなら、戦つてもいいな」

「そりや、ありがど~」

隆矢も、同じように笑つた。

紅瞳の少年を仲間にし、主人公たる彼は進み続ける。
この、嘘から始まった現実の世界を。

第五話 赤目の少年と隆矢の答え（後書き）

小学校の頃の自己紹介文をもつと眞面目に書けばよかつたと思つこの頃……

ちなみに自分は本当に殴り合いから始まつた友達が居たり。半年後には何故か一緒にゲームしてたという（笑）

Sword 説明集（前書き）

これはこの話の説明集です。
後々追加されて行きます。
意見があつたらビシバシ言ひやがって下さい。

Sword 説明集

Sword 説明集

魔導士陣紹介。

高町 隆矢

容姿 黒目黒髪

年 十四歳

魔導士ランク 不明だが、陸戦の方が高い
デバイス ソードソウル

ミットチルダ式 カートリッジ無し

魔力光 黒

今作品の主人公。

死ぬ前は日本の高校一年生だった。

現在は高町家の一員であり、なのはの兄となっている。

最初は精神的に荒んでいたが、なのはが生まれた日を境目に彼は変わった。

口調が多少悪く、大雑把で常識が無いところもあるがいい兄貴分。ミッドチルダ式だが接近戦、陸戦での切り結びをもつとも得意とする。

恋愛は興味無し、というより他に色々あるのであまり考えていらない。戦い方は射撃魔法などを殆ど使わず、己の剣で戦うことが殆ど。二刀流で、その剣技は天賦の才と長きに渡る努力に支えられている。

ハル・フォーマス

容姿 青髪緑眼

年 八歳

魔導士ランクAAA -

デバイス エアストロ?

ミッドチルダ式 カートリッジ有り

魔力光 蒼色

主人公への親友キャラその一……では無く実は二。話の流れ上、先に出た。

過去に彼を根本から変えてしまう事件があつたようで、彼は昔程笑つたりするなどの感情を見せていない。時々かける伊達眼鏡もそれの現れである。

ちなみに優秀なマイスター（デバイスを作つたり直したりする人）でもある。

性格は冷静で、口数はそこまで少なく無いがどこか時折感情を消す。ミッドチルダ式の中・遠距離タイプ。弓や銃などの形態の飛び道具を使う。

恋愛はさっぱりである。まだまだアリサとも友人以上恋人未満の関係。

戦い方は空戦が得意で、誘導弾、直射弾、炸裂弾、貫通弾。ありとあらゆる射撃、砲撃魔法を使って敵を倒す。

レオ・レイヴェルト

容姿 黒髪黒目

年 十六歳

魔導士ランク AAA+

デバイス アルティメット

近代ベルカ式 カートリッジ有り

魔力光 薄い青

オリキヤラの一人。

本来、立場的に味方の筈なのだが何故か敵になつてゐる。
ちなみに転生者では無く、両親は既に他界してゐる。

性格は優しく、ヨーリ達のストッパー兼ツッコミ役だった。だが敵にまわつてからは殆ど笑わなくなつてゐる。

近代ベルカ式というが、正確には近接戦ではベルカ式を、補助遠距離の魔法はミットチルダ式の魔法を使う。かなり特殊だが、それを使いこなせていることからレオの実力の程が伺える。

確実にリタのことが好きだが、何故かその気持ちをある人物以外にばらしていい。しかもその気持ちに封をしているようだ。

戦い方はミットチルダ式による遠距離の攻撃、身体強化、回復など。ベルカ式による近接魔法を駆使したオールラウンダーの前衛寄り。ガンブレードという特殊な奇形の剣を使う。

アスカ・ウェスペリア

容姿 オレンジの髪蒼眼

年 十四歳

魔導士ランク AAA -

デバイス エクソルキザンス（エクソルと普段は呼ぶ）
ベルカ式 カートリッジ無し

魔力光 オレンジ

レアスキル・魔力変換

オリキヤラであり、一応今作品のヒロイン?になる予定。

転生者だが、実は原作知識という物が全く無かつた。

そのせいで過去に色々有つたのだが、それを信頼した人間にしか喋つていない。

性格は大雑把。だが仕事などは意外とマメな部分が多い。そしてツンデレが多かつたり。

ベルカ式には、隊長であるフオンの影響もあると思われるが、一番の要因はレアスキルだろう。

恋愛は興味が無かつたようだが、隆矢のことを時が経つにつれ徐々に意識し始める。

戦い方はとにかく近接戦闘。前衛。大剣でぶつた斬る。

中・遠距離魔法を一つしか持つていない。これはアスカのレアスキルが特殊過ぎるせいである。詳しくは下の項目で。

容姿 茶髪緑眼

年 十五歳

魔導士ランク S -

デバイス アスピオン

ミッドチルダ式 カートリッジ無し

魔力光 金色（少し薄い感じがある）

かの作品から参加して貰ったキャラの一人目。

転生者では無く、とある事情からコーリ達と一緒にギルドに所属している。

両親に関する過去のことはユーリ達にすら殆ど話しておらず、レオにのみ、ほぼ全てを話している。

性格はクーデレとツンデレが入り混じったような感じで、よくツッコミを入れている。年相応の少女のような部分も、大人顔負けの冷静な部分もあり、大人になりきれない子供と言つた所。

ミッドチルダ式の使い手であり、逆に魔法の有名な開発者。天才魔導少女と呼ばれている。

恋愛感情は本人自身、まだハッキリ自覚していない。だが、レオのことになると物凄く年相応になり、周りはよくそれに苦笑している。戦い方は遠距離からの圧倒的な魔法の連発。魔力もかなりあるため、リタはこの戦法をよく取る。ただしその分接近戦が余り凄く無く、相手がベルカ式でかなりの使い手だった場合、ランクが格下でもかなり手こずっている。

紅宮連あかみやれん

容姿 黒髪紅瞳

年 八歳

魔導士ランク AAA -

デバイス フレンベルグ

近代ベルカ式 カートリッジ有り

魔力光 紅色

魔力変換資質・炎

オリキヤラの中で一番早く作られたキャラ。

転生者で家族も一人を除きちゃんとい。その一人がレンの人格に大きく関わっているのだが……

いつも笑顔で優しく強い芯を持つが、それは一部の人には分かる偽りのものだった。

よくバカやつてハルやアリサに説教などをされている。

趣味は様々で運動も読書も大好き。

近代ベルカ式で、ナックルによる肉弾戦を好む。魔力変換資質もあり、かなりの実力。

恋愛感情は不明。ただし、すずかには相当好かれている模様。

戦い方は勿論、近接戦闘。射撃など全くといっていいほど使わない。戦いのセンスはこの物語に登場するキャラの中でも一番あり、勘も鋭い。

フォース・ラインベル

容姿 銀髪金眼

年 二十代?

魔導士ランク S -

デバイス ホワイト

ベルカ式 カートリッジ有り

魔力光 白

白の団を統括する女性。

過去は謎に包まれており、何歳なのかも分からぬい。

家族なども不明だが、彼女にとつては白の団 자체が家族のような物らしい。

性格はもの静かで、リーダーとしての気品を感じさせている。ベルカ式の使い手で、相当の実力を持つてゐる模様。

恋愛は不明。

戦い方は余り知られて無いが、恐らくベルカ式らしく接近戦が得意だと思われる。

オリジナル魔法

「Aeria^{Hコアルショート}l? Shot」使用者・転生者A

本作で最初に使われた魔法。

初級の射撃魔法で、威力は其処まで無いが、殺傷設定だつたため極めて危険な魔法になつていた。

初登場 第一話

「Saver^{セイバーレイン}? Rain」使用者・転生者A

広範囲殲滅魔法。

大量の魔力刃を己の周囲に形成、相手に向かつて降り注がせる。

その威力もさることながら、殺傷設定だつたため、もはや殺人兵器だつた。

だが、使用者自身の実力が低かつたため、魔力任せの強引なものに。そのためデバイスに多大な負荷がかかり、暫く魔法を放つことが出来なくなつていた。

初登場 第一話

「てんそうこうげき 転送攻撃」使用者・転生者A

転送魔法と射撃魔法を組み合わせた魔法。旅の扉に似ているが、こちらは魔力弾自体に転送魔法を使って相手の所に飛ばす。そのため、術者によつては砲撃魔法すらも転送することが出来る。難易度が高く、転生者Aはデバイスの補助があつても魔力弾一つが限界だつた。

初登場 第一話

「オートプロテクション Auto Protection」使用者・高町隆矢

隆矢が最初に使つた、というよりはソードソウルが彼の魔力を使って自動で展開した魔法。

ソードソウルに備え付けられたAIによる自動術者補助機能の一つであり、かなりの魔力を必要として耐久度もそう高く無いが、緊急時の防壁としてはかなり使える。

初登場 第一話

「まいりょくくぎょうしづく 魔力凝縮」使用者・高町隆矢

厳密に言えば魔法では無いが、魔力を使用するためここに記載する。魔法というのは魔力を術式を通して発動する物。だがこれは魔力をそのまま圧縮し、魔法的ダメージを与えられるようにしたある意味魔力の無駄使い。

隆矢の魔力がかなりあつたのと、凝縮、収束する力が高かつたため、相当の威力が出た。

初登場 第一話

「黒刀召還」使用者・高町隆矢

魔力によって構成された剣を呼び出すための魔法。隆矢は太刀の一ノ刀流であり、ソードソウルは一つしか太刀が無いためこの魔法で一刀流になる。

かなり簡単な術式で、魔力を凝縮するというのが得意な隆矢には気楽に使える魔法である。

初登場 第二話

「振動斬」使用者・レオ・レイヴェルト

レオの扱うガンブレード特有の機能。

魔力が凝縮されたリボルバーの弾倉が、トリガーを引くことにより炸裂して膨大な振動を生み出し、刀身を震わせる。。

剣の打ち合い、障壁破壊などありとあらゆる場面で絶大な力を誇る斬撃である。

威力は大剣の一撃を超える。

初登場 第三話

「Triple Shot」使用者・レオ・レイヴェルト

デバイスの周囲に三つの光弾を出現させ、相手に飛ばす射撃魔法。直射弾というよりは細いレーザーに近い。着弾と同時に炸裂する。

初登場 第三話

「Ivey Rush」使用者・リタ・モルディオ

攻勢バインド。鋼の輪に近い。

大地、もしくは空中に展開した魔法陣から魔力によるトゲ付きの薦を出現させ、相手を絡みとるか、もしくは貫いて捕縛する。拘束力よりもダメージによる痛みで解除させないよう作り正在る。

初登場 第二話

「Frame dragon」使用者・リタ・モルディオ
竜の姿をしたリタ特製の誘導型砲撃魔法。

砲撃としてのスピードを犠牲にすることにより、直角に曲げれる程の誘導性と、かなりの炸裂能力を持つ。リタは最初、レオとの距離がそんなに離れて無いため、溜め無しでこれを放っている。

初登場 第三話

「Himmel Flieg」使用者・紅宮連
ドイツ語で「空翼」という意味。

レン専用近代ベルカ式魔法で、足の裏に特殊な力場を形成。空気を蹴つて移動することが出来るようになる。

発動時はブーツの踵から一枚の羽が展開される。

初登場 第五話

「Riese Faust」使用者・紅宮連
リエセファスト

近代ベルカ式魔法。ドイツ語で「巨人の拳」。

右手に魔力を凝縮、殴つて炸裂とシンプルだがその分安定した威力を持つ。

更にレンの場合、ナックルの加速機能と魔力変換資質により高い威力を持つ。

初登場 第五話

「物質操作」使用者・高町隆矢
ぶっしつさくさ

極々簡単な、物質操作の魔法。

魔法を学ぶ者なら誰しもが使える魔法でもある。しかも隆矢が操作したのはデバイスなため、距離があつてもかなりのスピードで動かせた。

初登場 第五話

「神速一閃」使用者・高町隆矢

隆矢がレオの動きを見て負けじと習得した高速機動魔法。

溜めが少しある、距離の細かい指定が出来ない、ほぼ直線移動のみという弱点も多いがその速度は正に神速。

通り過ぎる際に切り裂いたり、高速接近などかなり使える魔法である。

初登場 第五話

デバイス紹介

『ソードソウル』持ち主・高町隆矢

高町隆矢の相棒。本来、ハルの試作品デバイスだったがソードソウルが勝手に隆矢をマスター登録したため隆矢の物になつた（ちなみに出世払い）。

ストレージデバイスだが、術者をフォローするため簡単なAIが搭載されている。

何故かアームドデバイス並の頑丈さを誇り、ニッヂチルダ式の隆矢が遠慮無く接近戦が出来る。

バリアジャケットは黒のコートに所々白い鋼の装飾や防具が付いている。武器は一本の太刀。

カートリッジは無し、モードも少ない。

『Standby Mode』スタンバイモード

普段の姿。待機状態。黒いダイヤが嵌め込まれた剣を象ったペンドントである。

この状態でも魔法は使え、ソードソウルの術者補助機能も発動する。

『Device Mode』デバイスマード

一本の機械仕掛けの太刀を出現させる。鍔に当たる部分に黒いダイヤが。

どの性能に特化している訳でも無く、敢えていうなら形状的に近接戦闘に特化している。

『エアストロ』 持ち主・ハル・フォーマス

ハル自作のインテリジョントデバイス。普段はカードにして胸ポケットの中に入れている。

モードは意外と多い。理由としては中～遠距離の戦闘だけでなく、様々な局面に対応するため。

ハルのために（というよりハルが作った）作られた物のため、ハルとの相性は抜群である。ミッドチルダ式の中～遠距離に特化している。

バリアジャケットは長袖の黒いコートに黒いズボン。コートは結構長めに形成されている。

武器は弓。だがモードをいろいろ変えるため、一概には言い切れない。

カートリッジは六個。砲撃の上乗せによく使つ。

『Standby Mode』スタンバイモード

銀色のカード。

普段は喋らず、胸ポケットにいる。

『Arrow Mode』アローモード

最初の体型。主に射撃魔法に使われる。全長一メートル程の機械じかけの弓。弓の本体にちゃんと薬莢が出る部分がある。

『アルティメット』 持ち主・レオ・レイヴェルト
レオが使う、この世に一つしかない特別なデバイス。

とある経緯でレオに渡った。最初は壊れた状態だったのだが、リタとの共同作業により復元。つまりレオとリタの愛の結晶（よくこう）言られてからかわれる）。

ガンブレードという誰が考えたか分からない奇形の剣であり、完璧に扱えば絶大な力を誇る。

分類はアームドデバイス。

バリアジャケットは黒を中心とした服装で、所々に獅子飾りが付いている。

カートリッジシステムも付いており、最大六発のマガジン式である（リボルバーはガンブレードの特殊な魔法のため）。

普段は指輪の形で左手の人差し指に挟まっている。
色は銀色と黒。

『Standby Form』スタンバイフォーム

『Cancer braid? Form』ガンブレードフォーム
ガンブレードを呼び出すモード。これだけでレオは近中遠距離戦闘の全てを完璧にこなす。

ガンブレードの刀身は八十は有り、かなり大きい。

『エクソルキザンス』持ち主・アスカ・ウェスペリア
アスカ専用、というよりアスカが持つレアスキルのために調整が施されたベルカ式アームドデバイス。
バリバリ前衛のアスカはこのデバイスによる大剣を使って戦う。
普段はペンドントになっている。

モードは少なく、単純なアスカには此方の方がいいらしい。
騎士甲冑は布が多い鎧。左肩のガントレッドが特徴。
カートリッジシステムも勿論有り、最大装弾数は七つ。

『Stand by form^{スタンバイフォーム}

普段の状態。オレンジ色の剣型ペンドントで、首からかけている。

『Brain drain form^{ブレインドRAINTフォーム}

巨大な片刃の大剣を生み出す。

アスカの身長よりも大きく、重量も相当なもの。

カートリッジを吐き出すための排気ダクトが大剣の背に付いている。
装飾も特に無く、無骨で恐ろしげな武器。

『アスピオン』持ち主・リタ・モルディオ
帶型の魔法を補助する機構が高いデバイス。

銃型や杖型のように魔力の収束を助けてはくれないが、代わりに術式の展開速度や効率をアップしてくれる。

バリアジャケットは左右非対称の不思議な服装。

戦闘中は帯型で、普段は何故か本の形。

カートリッジは無し。

『Standby Mode』スタンバイモード

辞典並みの厚さがある本になつていて、よくリタはシシコ//にこれを使う。デバイスでぶつ叩いていいのかといつ質問は無しで。

普段は腰のホルスターにはめている。

『Scrolly Mode』スクローリモード

長さ不明の緑色の帯が出現する。

帯の表面は魔法の術式で埋まっており、これを操ることで大魔法を連発することが出来る。

『フレンベルグ』 持ち主・紅富連

レンが誕生日に貰った近代ベルカ式のアームドデバイス。

見た目は指輪で、紅い色と黒い色が混じったような感じ。右手につけている。

モードは少ない。近代ベルカ式というのもあるし、接近戦以外を殆どしないため。

バリアジャケットは前を開けた半袖コートに、シャツ、ジーンズ、ブーツといった日頃の服装にしてもおかしくない物。

武器は肘まで届く手甲付きのナックル。空戦でナックルというのは珍しいが、レン独自の魔法がソレの短所を劇的に減らしている。カートリッジは片方に六個。合計十一個入っている。

『Standby Form』スタンバイフォーム

見た目は特に装飾の無い指輪。

普段は右手の仲指に付けている。

『Knuckleform』ナックルフォーム

普段はこれだけしか使わない。スバルと同じように右手左手に機械のナックルを生み出す。

レンの魔力変換資質のことも考えて作られており、一発一発のタメた拳の破壊力は砲撃魔法レベル。簡単な射撃魔法ならこの状態でも使える。

その他（レアスキル、意味不明の単語など）

「白の団・黒の団」

転生者や一般の実力者から構成されたギルド。

管理局からもかなり目をつけられている（実力者ばかりなため）。

白の団は質が良く、黒の団はとにかく数が多い。

主義も全く違い、組織間の仲は悪い。

普段は管理局にはいかないような仕事や依頼をしている。

「レアスキル・魔力変換」

魔力変換資質では無く、全く別の力。

相手から放たれた魔力を自分へと変換。吸収することが出来る。

但し、相手からじかに魔力を吸い取つたり、空気中の魔力は変換出来ない。

後無意識のうちに発動しないように気よつけている。何故なら、自分の魔法や、転送魔法まで焼き消してしまう可能性があるから。だが、それを先引いても射撃、砲撃魔法使いにはとても効果的なレスキルである。

「魔力変換資質・炎」

魔力を自然の現象である炎に変える力。
魔力を電気や氷などに変えるのは術式と力があれば可能だ。
だが、レンの場合そういうプロセスを踏まずに魔力をそのまま炎に変えることが出来る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1481m/>

魔法戦記リリカルなのは Sword

2010年11月5日06時14分発行